

大久保F遺跡発掘調査概要報告書・I



平成15年3月

熊取町教育委員会

はしがき

古くから熊取野とよばれた本町域は現在まで変わることなく「熊取」として独立した地域を保持してきた町です。

町内には重要文化財の中家住宅や降井家書院など本町固有の文化財の他、43ヶ所を数える埋蔵文化財包蔵地が知られます。

熊取町教育委員会は皆様の御理解を得ながら、毎年50件程の緊急発掘調査を実施しています。この十数年来の調査で多くの資料を得ました。

本書は平成14年度に熊取町紺屋に所在する医療法人三和会永山病院の老人福祉施設建設工事に伴って実施した発掘調査の報告書として作成したものです。今後多方面の研究に役立てされることを願っています。

最後になりましたが、本年現地での発掘調査にあたって御協力をいただきました関係者各位に対しましてここで厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

熊取町教育委員会

教育長職務代理者 川畑 修孝

例　　言

1. 本書は、平成14年度に熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係が実施した大久保F遺跡発掘調査における概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係考古学技師前川淳を担当者として、平成15年1月24日に着手し、平成15年2月13日をもって終了した。
調査では、調査区をカラーリバーサルフィルムと白黒フィルムで撮影し、調査区遺構配置図（平面図）調査区壁面図を作成し、記録保存の作業を実施した。
3. 本書における図面の標高は、T. P.（東京湾平均潮位）を用いた。また方位は、地図以外については磁北を示すこととした。
4. 本書における図面の土色は、『新版標準土色帖』第10版（小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修1990年度版）を用いて目視により比定した。
5. 本書の作成及び発掘現場での作業にあたって、下記の調査員・調査補助員・作業員の参加を得た。
関井澄子、永橋祥之、前田公子、森田 享子、山本恵子
6. 本書の執筆は熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係考古学技師前川淳が行った。

目 次

第1章 熊取町の埋蔵文化財

第1節 熊取町の地理的環境	1
第2節 熊取町の歴史的環境	1
第3節 周知の遺跡	3

第2章 調査の概要

第1節 周辺でのこれまでの調査	4
第2節 調査の契機・経緯	5

第3章 大久保F遺跡02-1区の調査

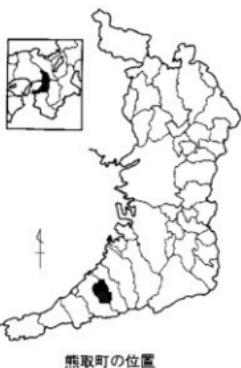
第1節 層序	6
第2節 遺構	7
第3節 遺物	11

第4章 まとめ

14

第1章 はじめに

第1節 熊取町の地理的環境



熊取町は大阪府泉南地域の中央に位置し、貝塚市・泉佐野市の両市に囲まれた町である。町域は東西約4.8km、南北約7.8kmと南北に長い木の葉状を呈している。町域の総面積は約17.19km²を有する。地形による面積比を見ると、山地41%、丘陵24%、段丘23%、低地12%に区分され、山地・丘陵部が町域総面積の約3分の2を占めている。地域別に見ると、町南部においては、泉南地域の基本山地の和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている。また北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。町域に水源を持つ河川は雨山川・和田川・大井出川・見出川の4水系が存在している。いずれも町南部の山間部を水源としており南部から北部へ向かって流下し、泉佐野市を経て大阪湾に注ぎ込んでいる。本町が瀬戸内式気候の東端に位置しているために年間降雨量が少量であることから、古くから町域一帯に多くの灌漑用の溜め池を目にすることができる。

第2節 熊取町の歴史的環境

町内の遺跡は、今回の大久保F遺跡の発見によって43ヶ所を数えるようになった。

縄文時代以前の遺構は発見されていないが、東円寺跡の所在する熊取町野田の町立中央小学校で縄文時代早期の有舌尖頭器と石鎌が検出されているので、東円寺跡は縄文時代からの複合遺跡である。

弥生時代の遺跡も発見されていない。JR熊取駅のある大久保における駅前整備事業に伴う平成元年の発掘調査では畿内第V様式を示す土器が大量に検出され大久保E遺跡となつたが、その土器は古墳時代初頭の所産と考えられている。

古墳時代の遺跡は、初期の大久保E遺跡以外知られていない。

飛鳥時代については、平成10年度の久保城跡98-1区の調査で複数の溝が検出され、その中から飛鳥V様式といわれる土師器や須恵器が出土した。

奈良時代についてはこれまで東円寺跡87-1区の調査で建物4棟と土壙、須恵器、土師器が検出されたのみにとどまっていたが、平成11年7月熊取町七山で西暦750年以降の奈良時代を示す多くの須恵器が宅地開発の発掘調査で検出され、熊取町第41番目の「七山東遺跡」となった。

平安時代については、野田の熊取町役場付近に想定されている東円寺の創建が、発掘調査で発見された軒瓦の比較考察から平安時代末とされている。また平成8年度には大久保から紺屋にかけての私立病院の発掘調査で黒色土器や須恵器、土師器が遺構内から検出されている。

鎌倉時代に関しては、熊取町内の遺跡のほとんどが同時代を中心とした様相を示している。野田の東円寺跡、久保の久保城跡、大浦の大浦遺跡、紺屋の紺屋遺跡、七山の七山東遺跡では

瓦器を豊富に含む包含層が存在しており、建物・溝といった遺構も検出されている。

室町時代の包含層は町全域で検出される。重要文化財に指定されている和田の来迎寺の調査では戦国期の多数の上器器皿と瓦片が出上している。また小垣内西遺跡では15世紀末から16世紀に熊取を支配した細川氏被官の行松氏居館の一部とみられる遺構が検出されている。

江戸時代の遺構としては、五門の重要文化財中家住宅と大久保の重要文化財降井家書院の周辺で多数の陶磁器や瓦の他、多くの溝跡・土壌が検出されている。現在の熊取町の前身は江戸期の大庄屋2家の主導の基に成立したものであって、この二つの重要文化財の周辺における調査は熊取町の歴史にとって極めて重要である。

第3節 周知の遺跡

周知の遺跡一覧表

熊取町埋蔵文化財包蔵地一覧

番号	遺跡名	種類	時代	地目	立地	面積	正な成果等
1	降井家書院	建造物	宝町~江戸	宅地	平地	4,000m ²	国指定重要文化財
2	中家住宅	建造物	宝町~江戸	宅地	平地	4,500m ²	重文・江戸期から明治頃の陶磁器等出土
3	来迎寺本堂	寺院	倉町	宅地	丘陵腹	3,100m ²	重文・15~16世紀の陶磁器・土師器等
4	池ノ谷道跡	散布地	旧石瀬木田	宅地	平地	62,300m ²	
5	甲田家住宅	建造物	江戸	宅地	平地	5,000m ²	
6	東円寺跡	寺院	繩文~江戸	宅地	平地	310,000m ²	繩文~江戸の復旧道路。寺院は不明
7	城ノ下道跡	城郭跡	町	宅地	丘陵	61,800m ²	
8	成合古道跡	墓地	町	傾地	丘陵腹	69,000m ²	14世紀代の600基以上の土塁墓群等検出
9	高藏寺城跡	城郭跡	宝町	山林	山頂	34,800m ²	土塁・堀切等の遺構を確認する
10	南山城跡	城郭跡	宝町	山林	山頂	45,300m ²	月見ノ亭・馬場・千畳敷の地名が残る
11	五門古道跡	散布地	古墳~江戸	宅地	丘陵	2,300m ²	土師器等が検出される
12	五門北古墳	古墳	古墳	宅地	丘陵	1,900m ²	現在消滅
13	五門古墳	古墳	古墳	宅地	丘陵	1,500m ²	現在消滅
14	大中世墓葬	墓地	地室	町	墓地	平地	18,400m ²
15	久保城跡	城郭跡	宝町	水田	平地	85,300m ²	飛鳥期の溝から須恵器・土師器、鉄工具等
16	山ノ下城跡	城郭跡	宝町	宅地	平地	6,800m ²	
17	大谷池道跡	散布地	古墳~江戸	水池	平地	51,400m ²	
18	整札御所跡	祭礼跡	宝町	山林	丘陵	6,300m ²	五門・組屋共同墓地
19	正法寺跡	寺院	宝町	山林	丘陵	55,000m ²	
20	小畠内道跡	寺院跡	江戸	通路	丘陵	7,000m ²	毘沙門堂跡。現在消滅
21	金剛法寺跡	寺院跡	宝町	宅地	平地	5,100m ²	大森神社・神宮寺
22	鳥殿城跡	城郭跡	宝町	山林	丘陵	72,600m ²	
23	盛ノ谷道跡	寺院跡	宝町	山林	丘陵腹	32,000m ²	
24	花成寺跡	寺院跡	宝町	山林	丘陵	28,000m ²	
25	降井家屋敷跡	屋敷跡	宝町~江戸	宅地	平地	12,000m ²	屋敷地を区画する溝や近世の陶磁器等出土
26	大久保A道跡	散布地	江戸	宅地	平地	8,100m ²	
27	大久保B道跡	条里跡	宝町	田	平地	5,700m ²	
28	大久保C道跡	集落跡	生牛~江戸	宅地	平地	47,800m ²	生牛木~古墳初期の遺物
29	紺屋道跡	散布地	古墳~江戸	宅地	平地	22,400m ²	奈良~平安の河川跡検出
30	白地谷道跡	散布地	宝町~江戸	田	谷	129,600m ²	
31	大久保D道跡	散布地	宝町~江戸	宅地	平地	4,500m ²	
32	千石瀬城跡	城郭跡	宝町	山林	丘陵	1,000m ²	大正年間(1913~1922)の雑賀衆伐の城跡
33	口無池道跡	散布地	平安~江戸	宅地	平地	11,200m ²	平安木~鎌倉初期の遺構、遺物
34	大久保E道跡	散布地	鎌倉~江戸	田	平地	9,200m ²	
35	人浦道跡	散布地	鎌倉~江戸	田	平地	4,900m ²	13~14世紀の瓦器等検出
36	久保A道跡	散布地	鎌倉~江戸	宅地	平地	4,400m ²	建物跡、8~14世紀の土器
37	大久保F道跡	集落跡	生牛~江戸	宅地	平地	2,900m ²	生牛木~古酒初期の遺物多数
38	久保H道跡	集落跡	鎌倉~江戸	宅地	平地	5,000m ²	13~14世紀の瓦器等検出
39	中家住宅周辺道跡	集落跡	宝町~江戸	宅地	平地	21,300m ²	近世の陶磁器多数
40	朝代北道跡	散布地	鎌倉~宝町	宅地	平地	60,000m ²	13~14世紀の瓦器等検出
41	七山東道跡	散布地	奈良~宝町	田	砂	80,000m ²	古代須恵器・土師器・瓦器等検出
42	小垣内西道跡	集落跡	奈良~宝町	宅地	平地	3,600m ²	古代須恵器・土器・瓦器等検出
43	大久保F通路	集落跡	生牛~宝町	宅地	平地	1,436m ²	石跡・平安頃の建物等検出

熊取町遺跡分布図



第2章 調査の概要



第1節 周辺でのこれまでの調査

今回の申請地の周辺には、多くの遺跡が既に周知されている。中でも北西約100m程の距離には、平成元年・2年の公共事業に伴う調査で大量の古墳時代初期の土師器を検出した大久保E遺跡が存在する。

大久保A遺跡

大久保にはA～Fと6つの遺跡が確認されている。最も南部の大久保A遺跡は中世の遺跡とされ、他とは大きく性格が異なっている。これまで確認調査が数度行われたに過ぎず未だ詳しいことは判っていない。

大久保B遺跡

JR熊取駅前には弥生時代から古墳時代頃を中心とするといわれる面積の広い大久保B遺跡がある。この大久保B遺跡ではこれまで2回の本調査が実施されて、弥生時代に比定される溝が検出されている。集落遺構との所見が残されているが、建物跡が検出されたことはない。

大久保C遺跡（本調査地点との直線距離150m強）

大久保集落の直中に存在するC遺跡ではこれまで本調査は実施されたことがなくその本来の性格は判明していない。但し近年数度にわたる個人住宅の確認調査で、非常に分厚い中世の包含層とさらに古代にまで溯る可能性の高い上層が確認されている。

大久保D遺跡

大久保D遺跡は最も北側に位置しているが、大久保B遺跡とほぼ同じような内容の遺跡として周知されるものの、これまで目立った遺構と遺物は検出されていない。

大久保E遺跡（本調査地点との直線距離100m強）

E遺跡は熊取町内では質・量とも最大級の遺物を出土している。古代土師器の破片点数は6468点にのぼり、復元後は完形品110点を数えた。その他も完形近くまで復元できるほど遺存状況がよく、土師器一括遺物としては好資料である。調査後の整理研究ではこれらは弥生時代第V様式を残すものの古墳時代初期頃の所産であるいわゆる庄内併行期における伝統的第V様式と呼称される土師器で、その中心は庄内式期Ⅲ（上田町1式・下田5期）付近にあるものと考えられ、一部に庄内式期Ⅳ以降（下田8期頃）の高杯が見られる。但しこれらの土師器群を扱った人々の集落等の遺構は一切検出されていない。またその後に続く時代の遺構は検出されず、僅かに瓦器破片群が検出されているようである。

紺屋遺跡（本調査地点との直線距離180m強）

元来本調査地点から北東約200mの距離に存在するスーパーマーケット建設の際に発見された古墳～江戸期にわたるといわれる散布地遺跡である。範囲内には今回の申請者の病院があり、平成8年度には病棟の新築工事に伴って発掘調査を実施し、遺構の流路（溝）から10世紀代の土師器群他を検出している。

第2節 調査の契機・経緯

大久保F遺跡は平成14年12月18日熊取町大久保中二丁目78番1において、医療法人三和会永山病院による老人福祉施設建設工事に伴う試掘調査を実施した際に、石鏡と古代の土師器を検出し、さらに溝状もしくは柱穴状の遺構を検出することに及んで新規に設定された散布地遺跡である。

文化財保護法第57条の5 第1項

申請地：熊取町大久保中二丁目78番1

開発者：熊取町大久保東一丁目1番10号

医療法人三和会 理事長 永山光紀

工事の概要：老人福祉施設

通知日：平成14年12月25日

遺跡名：大久保F 遺跡

上記の試掘調査結果及び工事施工計画を総合して、工事によって破壊されると想定される範囲内に対して記録保存を目的とする本調査を実施する必要性を判断し、その旨申請者へ通知したところ、発掘調査を依頼されたため発掘本調査の実施を決定・着手した。

文化財保護法第58条の2 第1項：埋蔵文化財発掘の通知

提出日：平成15年2月20日

届出者：熊取町教育委員会教育長職務代理者 川畑修孝

現地での本調査は平成15年1月24日に機械掘削より着手し、同年2月13日埋戻しを完了することによって終了した。

第3章 大久保F 遺跡02-1区の調査

調査地 大久保中二丁目78番1号

調査期間 平成15年1月24日～平成15年2月13日

第1節 層序

検出した壁面上層の基本層序を挙げる。

- ①7.5YR 6/6 橙色 砂質土
- ②10YR 7/4 にぶい黄橙色 砂質土
- ③10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土
- ④10YR 7/6 明黄褐色 砂質土（粘土混）
- ⑤7.5YR 5/2 灰褐色 砂質土
- ⑥10YR 8/8 黄橙色 粘質土 検出面 地山

①②③④層とも中世の耕土と考えられ、包含層を形成している。弥生～14世紀頃までの遺物を含んでいる。その境界について、①層と②層は明確な相違が見られるが、②と③の間は場所によって区別しにくい場合がある。色相よりも土壤の粒子の大小によって判別するなどした。④層は③下の床土でれど、色を呈するもの。⑤層は調査区の主に南半分の範囲に層厚最大5cm程度と薄く広がっている黒褐色に見える層でほぼ無遺物層、⑥層は無遺物のいわゆる黄褐色粘質上で地山視し、検出面とした最終面である。この⑥層は最終日に機械によってさらに1.5m

掘り下げたが、変化なく連続と同一層のままの⑥の状況が観察できた。

第2節 遺構

今回の調査で確認されたのは溝とピット群である。

溝SD 1

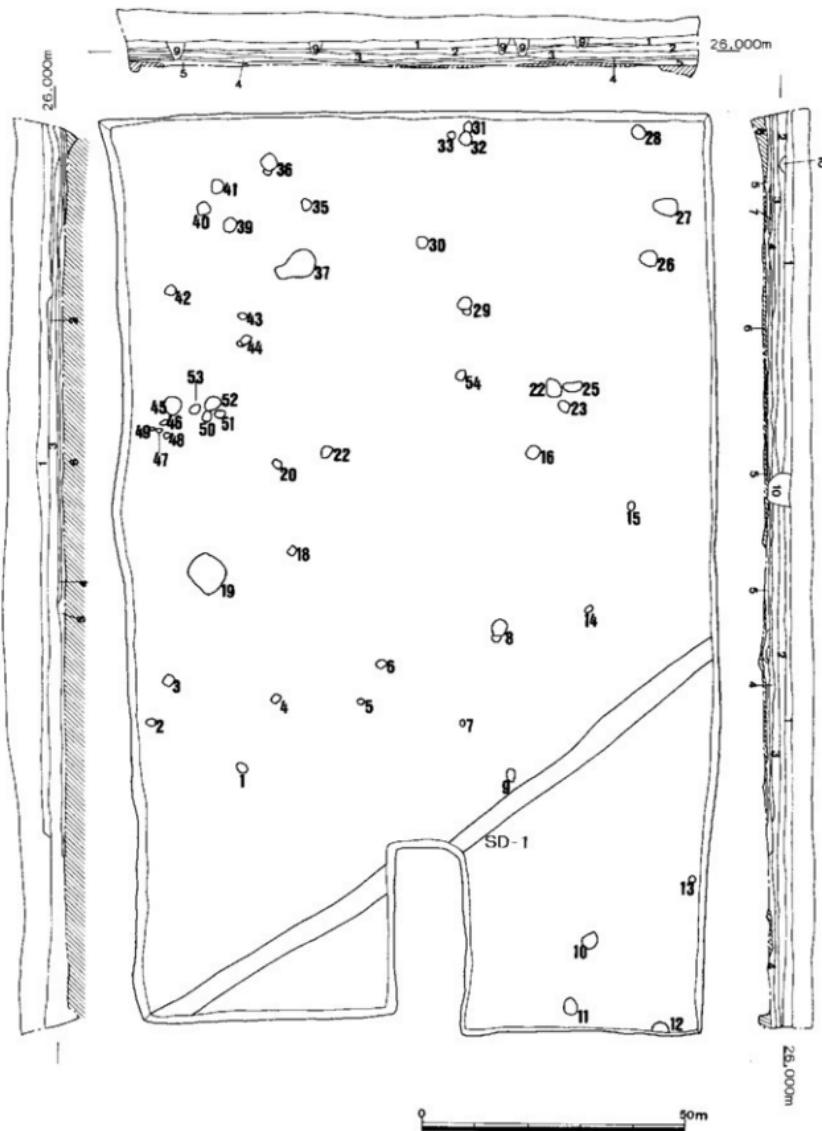
調査区の北西から北東隅へ1条の溝が検出された。検出面からの深さは約0.15m、幅は約40~50cmである。調査区内における総延長は約13mで区域外に長く続くものと考えられる。深さがなく断面U字状を呈し、出土遺物はなかった。この溝SD 1 がかかる調査区西壁での状況から、SD 1 とその上面に存在する包含層（耕作系）とは全く関連性がないものと考えられる。従ってこの溝SD 1 は調査地点付近に中世になって営まれた農耕地とはなんら関連がない遺構であるといえる。

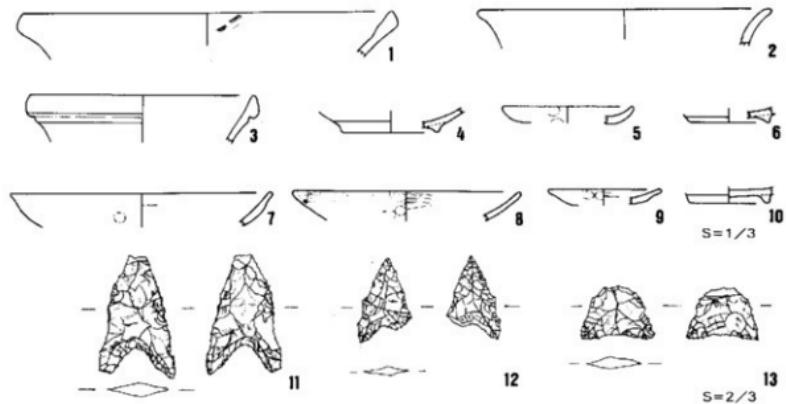
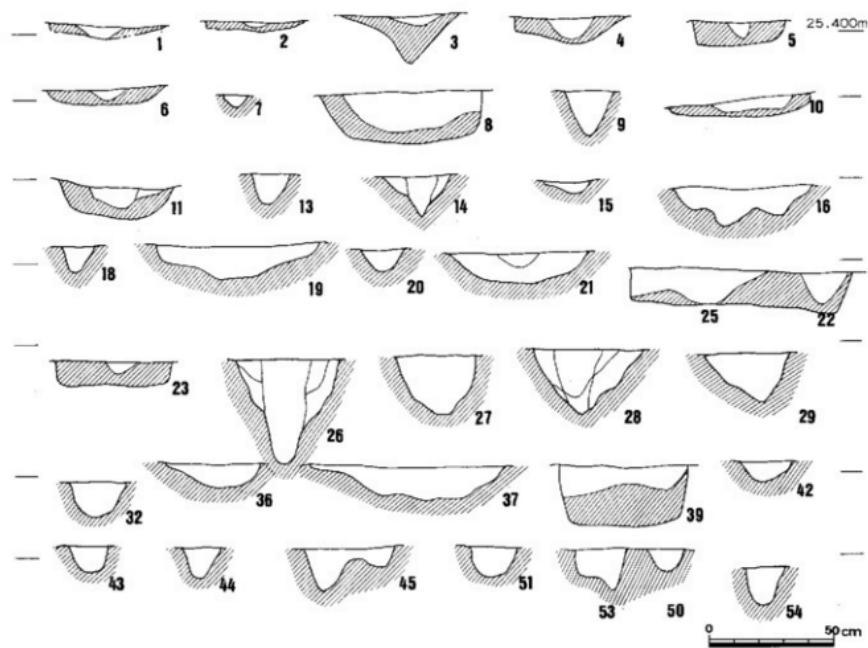
SD 1 の年代については、西壁の観察から⑤層の上から切れ込んでいることが判るため⑤層よりは新しい。⑤層は検出面とした地山面⑥層の上に調査区の南半分の区域一体に広がる黒褐色の層で、全くといってよいほど遺物を含まない層である。調査区南西端で辛うじてこの⑤層と地山⑥層との間から石鐵（遺物番号13）1点が検出されている。⑤層は調査区域で出土した最も古い遺物の石鐵3点よりは新しいことは確実である。また⑤層の状況は、調査区南西端で検出された後述の建物跡SB 1 を構成していると考えられる柱穴SP26~28の埋土に類似性が觀られる。溝SD 1 と建物SB 1 が全く同一期の遺構とは断定し難いが、調査区域内から出土した遺物からすると、比較的多く検出された土師器を生産した年代、平安時代中期の10世紀頃だったのではないかと考えている。調査区から奈良期の須恵器も検出しているため8世紀代からの年代も検討すべきであるが、建物跡SB 1 の柱穴SP 26の観察からすると奈良期の所産とは異なる感がある。

なおこの溝SD 1 の機能については、なんらかの水路であったことだけがわかるのみで、住居に関連するものなのか、農耕に関するものなのか等不明である。中世期の建物跡周間に検出される雨落ち溝的な溝の検出例は本町内では極めて多く、幅約30cm程度の断面V字或いは逆台形状の明瞭な溝とは明らかに相違する遺構である。いずれにせよほぼ一直線上に検出長だけで13mを測ることが、この溝SD 1 の性格を示すものであろう。

ピット群（SP 1 ~52）

調査区内には総数52基の平面不定円形のピット状遺構が確認できた。平面上直径は平均20cm程度のものが大部分である。このピット群の性格については詳細は不明であるが、いわゆる掘立柱建物を構成する柱穴群と確認できるものは、調査区の南西角部に検出されたSP26、27、28である。





掘立柱建物SB 1

調査区南西端に検出されたピットSP26～28の3基は明らかに掘立柱状を呈している。検出状況からSP26と28は同一建物を同時に構成していた柱穴と考えられ、調査区の西南方向に建物SB 1が存在していたものと考えられる。またSP27は柱を抜き取った痕跡と考えられる柱穴である。他の2基との状況の差から若干の時期差が存在する可能性があり、建替えを意味する場合がある。SP26とSP28の距離は2.4m、またSP26と27の間は1.6m、SP27と28の間は1mである。また今回の大久保F遺跡を新規に発見するに至った平成14年12月18日の試掘調査では、今回のSB 1の南西部つまり今回の調査区域外の場所に実施したトレンチ2でも柱穴上の遺構を2基検出している。この時のトレンチとこの柱穴SP26らとは約4.8mと近く、同一のSB 1を構成できているものと思える。

残念ながらSB 1を構成するSP26～28からは遺物は全く検出されなかつたので、その時代を特定することは困難であるが、調査担当者の現地での観察では調査区の北半分で検出した溝SD 1の埋土との類似を認め、また両者に遺物が存在しないなどの共通点、また町内の他の遺跡における遺構と遺物の検出状況との比較等からも、SB 1とSD 1の両者は瓦器破片を中心として共伴する中世遺構よりは古い古代の所産であると思われ、また柱穴の形状から飛鳥・奈良時代よりは新しい程度の遺構であると思える。このことは本調査の出土遺物のうち上質の土器が最も多く出土している点とは食い違わないのではないだろうか。

今回病院関連施設の工事で破壊が及ぶ範囲内に限定して調査区域としたために、この建物SB 1の大部分が調査区域の外であることが判明した。同時にSB 1の全体像が掴めず非常に残念であるが、今後この遺構が適切に保存されるよう努めていかなければならない。

その他のピット

またその他のピットに関しては、明らかに建物柱穴でないと思えるものSP 1・2・3等も存在するが、決して建物の柱穴ではないとは断定し難いものが多く存在する。それらの多くはおそらく壁面層序における中世の1層の上面から穿たれた遺構であり、数十cmの中世包含層を通して僅かに地山面の黄褐色粘質土層に（5～15cm程度）痕跡を残した遺構であったものと考えられる。これらピットの大部分が穿たれたのは本調査区域中世包含層が堆積した時期の後、14世紀～16世紀の間だったと考えられる。また今回の調査区域内から出土した遺物の内最も新しいものは、14世紀の尾上編年IV期相当の瓦器碗であり、近世の陶磁器類が一切皆無であることから、これらのピット群が14世紀代のピット群だった可能性がある。従って今回の検出面として設定した古代の遺構面海拔25.4mに達することなくおそらく14世紀代に穿たれた比較的浅い遺構ピットは、今回の調査面では検出することができずに中世包含層とともに失っていることになる。辛うじて検出面に残った中世の遺構ピットはそれでも52基中約20～30基程を数える。

このうちSP 9・13・14・15は平面上で直交するように並ぶので、相互に関連が考えられる。

不明瞭なピット

また検出面にはSP 8・19・37といった平面やや不定形であり、かつ埋土が明灰褐色と黄色粘土の斑状になっている非常に不明瞭で深さの確認し辛い遺構が数基検出されている。この埋土の特徴は前述の明瞭な柱穴SP26~28や、比較的浅く小規模なピットSP 1他などとは明らかに相違しており、同一検出面に検出したものの、或いは全く異なる年代の遺構であった可能性がある。このピット群の埋土は主に黄色を呈していて、地山面との識別がなかなか困難であることなどから、あるいは出土遺物のうち最も古い石鎚と関連する遺構なのかもしれない。残念ながら現地で採取した写真や平面図からは、これらのピットを組み合わせて石鎚年代に相当する明確な形状の遺構を復元することはできない。

第3節 遺物

石 器	石鎚 3	3
土 師 器	小皿 8・椀 9・鉢 1・器種不明 51	69
古 代 須 恵 器	壺 1	1
中 世 須 恵 器	鉢 2・壺 6	8
瓦 器	皿 2・椀 29	31
中 世 陶 磁 器	白磁碗 1・青磁碗 2	3
瓦	平瓦 1・丸瓦 1	2
合 計		117

※点数は接合前の破片（断片）の状態で計算

遺物

今回の調査では117片の遺物を検出した。溝SD 1 や52基を数えたピットから出土した個体はなかった。ほとんど全てが検出面として設定した海拔25.4m付近に存在する黄褐色粘質土から約0.3m以内の上部に存在する包含層を人力掘削した際に出土したものである。堅牢な石鎚は残存状況がよかつたものの、須恵器をはじめとする土器は投棄された後、後世の開墾等で攪拌されたらしく、1.5cm²大の破片になっている個体が多かった。

また上師器の中に明らかに2次焼成を受けて変色した個体が多く認められる。瓦器には少量、須恵器はない。中世の所産である上師器小皿に赤変した個体があることから、或いは中世に火災などがあったのかもしれない。ピット等の遺構には火災を示す痕跡は一切検出できなかつた。

なお上表に示すとおり、本調査出土遺物の種類別は、土師器60%、石器 2 %、須恵器 7 %、

瓦器26%、青白磁2%、瓦1%程度に分けられる。土師器は殆どが細片のため、細別が困難であるが、口縁が極端に短く、内湾する直口の小皿が比較的多く認められることから、土師器の大半も中世の所産であると考えられる。今回の大久保F遺跡遺物の中心は中世、13世紀代程にあるものと考えられる。

石器

調査区南西部という限られた範囲において、包含層及び検出面となった黄褐色粘質土面から合計3点の石鎌を検出した。ただし今回検出した遺構とは関連していない。3点ともサヌカイト製の無茎石鎌である。1と2はいわゆる凹基で、3が平基である。1と3は先端を欠損しており、2は凹基の片方を欠損している。1は推定3.9cmの長さがあり、2は2.6cm、3は約3cm程度だったものと考えられる。1の凹基わたりは8.5mm、2は5mmである。3も平基であるものの、約1.3mm程度回んでいる。

石鎌について本町内では野田の東円寺跡或いは南部の成合寺遺跡で数点検出された例があるが、いずれも縄文時代のものと考えられている。今回出土の石鎌のうち無茎凹基の1・2はわたりが大きいものの弥生時代前期相当と考えるべきものではないだろうか。2については形状からすると本町出土の縄文時代の石鎌と類似性が認められるが、全体の鋭利さが弱く、調整の繊細さが劣る点が観察できる。

須恵器

今回の発掘調査では古代・中世の須恵器破片を少量検出している。2は古代の須恵器壺の口縁部と思われる破片である。1は東播系こね鉢の口縁部の破片である。他に図示できなかったが、特徴のある須恵器が一点出土している。口縁端部が僅かに摘み上げ状になっており、外面に鋸歯状の櫛状工具による装飾文が施されている。また口縁端部に向けての体部の立ち上がりに丸味がなく直線的であることから、鉢ではないかと思われるが、本町では類例がない個体といえる。

土師器

土師器の破片数は69点と全体の約60%である。実測に適う大きさの破片は少なかった。器種は不明の小片が多く、判別できるところでは小皿が8点、椀もしくは皿の個体が9点存在している。中でも17(写真)は椀もしくは皿状の上器の口縁で、器高が削り低い直口の古代の器である。

瓦 器

この調査では土師器に次ぐ31点の出土で全体の26%を占めていることも特徴のひとつである。椀及び小皿の組み合わせの出土は野田の東円寺跡周辺の状況と変わらない。破片は約1.5平方cm程度の小破片であり、器種の特徴を見せる部分は少ない。明瞭に椀と認めるのは7と8が口縁部分、6と10が高台部分である。8はかなり扁平化した尾上編年によるⅣ期-1相当の個体で内面口縁付近にリング状の暗文を数条巡らす。7も口縁だが8よりは古くⅢ-4期ぐらいか。10の高台は断面が逆台形でⅢ-2期以前の個体、6は高台断面が逆台形化していることから一応Ⅲ-3期程度としておく。

9と16は小皿の口縁部を残す破片である。外形が類似し、同一時期の所産であろう。小皿でも口縁が短く、口径の小さな椀Ⅳ期相当の所産か。

瓦器の年代は尾上編年Ⅲ-2期～Ⅳ-1期の間隔と考えられ、瓦器については野田の東円寺跡周辺と同じ年代幅が観察できる。

陶磁器

白磁の碗の口縁破片が出上している。3は「太宰府条坊跡XV」における白磁碗Ⅸ類であると思われる。12世紀後半の年代が考えられる。

青磁碗破片は2点出土している。椀Ⅰ類かⅣ類に属するものか判然としない。体部外面無文であり、内面の模様も花文か雲文なのか判別しがたい。器壁は薄くなく、釉も青味がかった緑色でなく、どちらかといえば黄味がかったり、内外に貫入が観られる。やや粗雑な感がある。Ⅰ類であれば12世紀後半頃、Ⅳ類であれば14世紀代の年代が与えられる。

瓦

瓦片と認められるものは2個体で、約2cm程度のものである。平瓦・丸瓦とも2次焼成の痕跡が明瞭に認められる。中世には付近に瓦を葺く建物が存在した可能性が高いが、調査地点付近に寺院・堂等が存在していたという記録は見当たらない。

第4章 まとめ

①調査区南西端で検出された柱穴SP26以下3基からなると考えられる建物SB1と調査区北側で検出された溝SD1は古代の遺構と考えられる。これらの遺構からの遺物は検出しなかつたが、他の状況から9世紀以降12世紀前半までの平安期の遺構ではないかと考えられる。本町における明確な当該時期の遺構の検出例は皆無である。僅かに平成8年度に今回の調査地点から220m北東の紺屋遺跡96-1区の調査において、流路（溝）中より10世紀前半とされる土師器破片群が検出されている。その土師器皿に今回の包含層検出遺物と類似性を観察できるため、上記の遺構も10世紀代の遺構の可能性があるだろう。

熊取町における平安時代については、野田の旧東円寺が軒瓦の比較研究から平安時代末期の12世紀末頃に創建されたとされている。ただし共伴する瓦器碗は古くとも尾上編年Ⅲ-2期相当であり、あるいは平安期を過ぎた年代がこの寺院に相当するのかもしれないが、いずれにせよ本町における平安期を示す埋蔵文化財の検出例は今のところ極めて少ない。

奈良中期を示す須恵器群の検出例は町内各所で相当数報告されている。今回の調査でも僅かではあるが須恵器壺口縁等を検出しておらず、のことから8世紀中盤に一度に熊取開拓の手が及んだものの、律令制の衰退と同じくして短期間のうちに荒廃し、野田に旧東円寺なる寺院が創建され、中世に入るに及んで再び脚光を浴びて開かれ出したものと、その流れを簡単に解釈していたが、今回の検出面における遺構が、平安期にも脈々と特に熊取西部地区（大久保地区）で人々の営みがあったことを示すものということであれば、有意義な新しい知見と評価できる。

②また平安期に統いて13~14世紀代の遺物が検出されている。主に瓦器や瓦破片であるが、調査地点のある地域では古代から中世にかけて脈々と営まれたことが伺える。その出土状況、年代は野田の旧東円寺付近と全く同じであり、この時期には熊取は広範囲で同様の営みが行われていたものと推測される。あるいは統一的な組織的な事象による影響を示すとも考えられるだろう。さらに谷や丘陵をひとつつたつ越えた近隣市町とも比較するなどして、熊取との共通性、相違点等を研究するのもよいだろう。

③調査地点においては15世紀以降の遺物は皆無であった。14世紀代で住居等は廃され、農地となって今日に至ったものと考えて間違いない。

④調査区全体216m²未満の区城内からは3個体の石鎚が検出された。石鎚は弥生時代相当の所産と考えられる。いずれも当時の遺構から出土したものではなく、また弥生期と断定できる明確な遺構も検出することはできなかったが、調査面積と石鎚の検出数からすると、本町内では最も検出密度の高い例である。今回の調査地点ではこれらの石鎚を製作したような痕跡は一切検出しなかったものの、この3点の石鎚が全て調査区南西端部（前述の古代と推定

される建物跡SB 1 が検出された付近)に集中して検出された事実は、或いはこの調査区南西端部に当該時期(弥生時代)の住居等の営みが存在する可能性を残している。他市町村の石鎚の検出報告においては、狩獵などの偶然的な痕跡を示唆する検出例が大部分であるが、今回216m²の調査区内、さらに南西端部約80m²程度の枠内から3点の石鎚が発見されたという事柄を特筆して報告しておく。

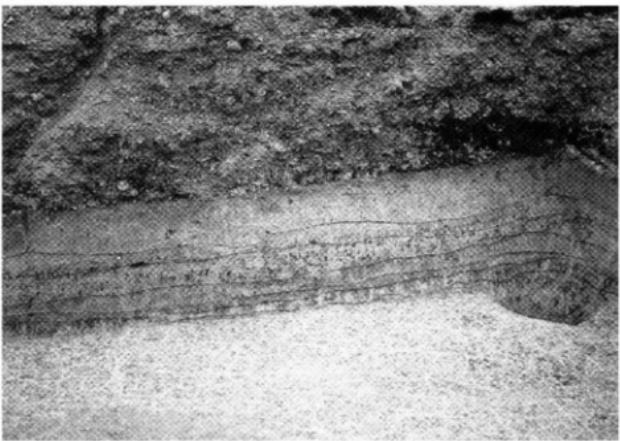
また明確な弥生土器もしくは縄文土器も検出していない。土師器破片の中に古代の土師器椀と考えられるものの他に、胎土が非常に粗い粗製の個体が7個体程観察できるが、約1cm四方の細片のため、石鎚と同年代の所産であるか不明である。

遺構の項で触れたが、今回の調査では地山面の黄褐色粘質土層と判別し難い不定形なピット状遺構(例SP19・37など)が検出されている。共伴遺物が皆無であるため年代を特定できないが、或いはこの石鎚との関連が存在するのかもしれない。

なおこれら3点の石鎚は全て同一年代の所産とは断定できない。いずれも無茎であるが、2点がいわゆる凹基式で、残りが平基式である。また凹基のひとつは推定高3.9mmと突出して大きく、個体間に法量差が存在していることも付け加えておく。

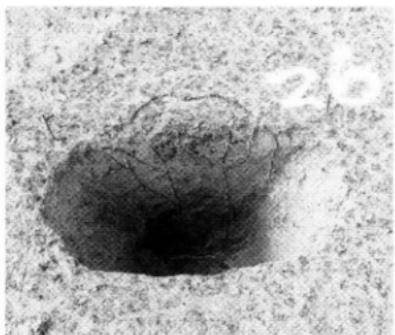


大久保F遺跡02-1区 調査区全景

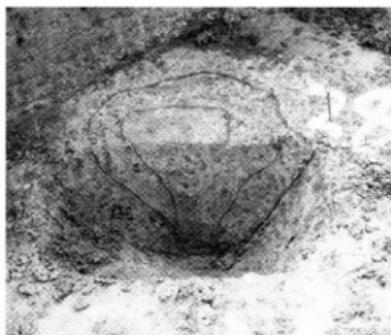


大久保F遺跡02-1区 調査区壁面

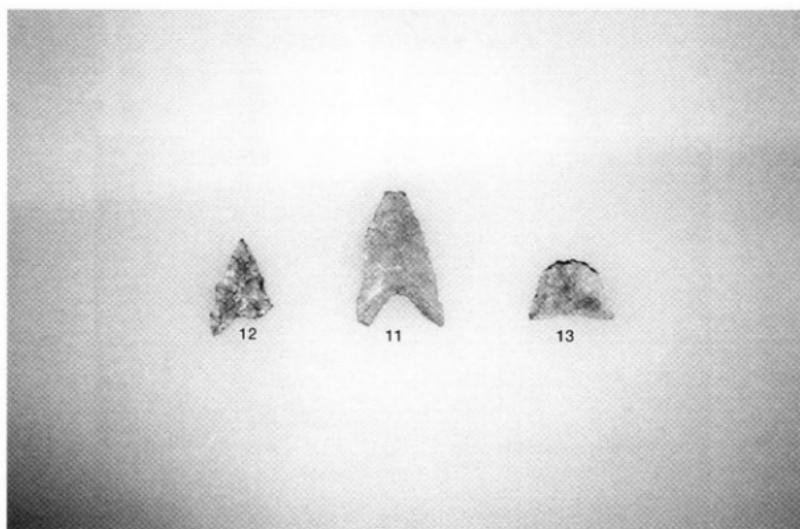
写真図版二



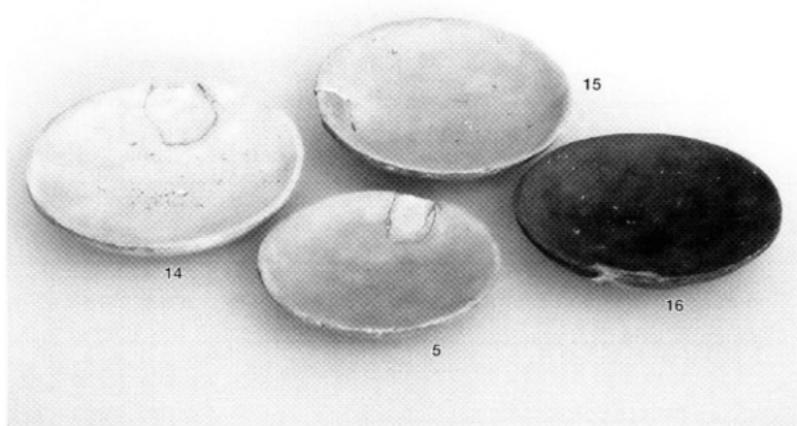
S P 26



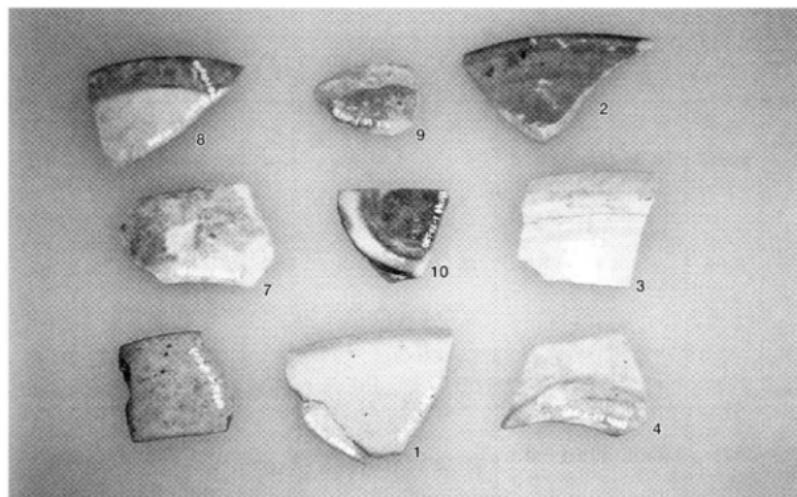
S P 28



石 鏃



土師器皿・瓦器皿



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおくぼFいせきはっくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	大久保F遺跡発掘調査概要報告書							
卷次	I							
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第43集							
編著者名	前川 淳							
編集機関	熊取町教育委員会							
所在地	〒590-0495 大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号							
発行年月日	西暦 2003年3月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおくぼF遺跡 02-1区	おおくぼせんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりょうおおくぼなか 熊取町大久保中	27361	43	34° 24' 00"	135° 20' 54"	20030124 20030213	216.0	病院施設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大久保F遺跡 02-1区	集落跡	弥生~室町時代	建物跡・ピット群・溝		石器・土師器・須恵器・ 磁器・瓦		古代主体の遺跡	

熊取町埋蔵文化財調査報告 第43集

大久保F遺跡発掘調査概要報告書・I

発行日 平成15年3月

発行・編集 熊取町教育委員会

大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号

印刷 小笠原印刷（株）

大阪府泉佐野市上瓦屋646番地